
どんな青空でもキミに逢えないと晴れじゃない。

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どんな青空でもキミに逢えないと晴れじゃない。

【Nコード】

N0151M

【作者名】

翠

【あらすじ】

【快斗↓蘭】 天空の難破船後日談。時系列は無視してます。（天空乗船日は8月17日ですが6月の話題）
拍手おまけ話あり

「『六月（水無月）の地さへ裂けて 照る日にも 我が袖干めや
君に逢はずして』……か……」

快斗は抜けるような青空に向かってため息をついた。それは瞬く間に風にさらわれていく。

新緑がまぶしい山々や、流されまいと必死に抵抗している雲の残がいをみるとはなしに見つめながら、快斗の意識は彼女の元へと飛んでいた。

「今日はいい天気だから、洗濯とかしてるんだろうなー。布団とかも干してたりして……」

なんて……屋上の柵から両腕をだらしく伸ばし、もたれながらつぶやいている快斗自身が干された布団のようである。

「もしかして、恒例の『新一の家のお掃除の日』なのかしんねーな……」

快斗はふと、彼女につねられた手のひらを空にかざした。

「あなた、新一じゃないわね」

そう言って彼女は快斗の手をつねり、頬を赤く染めながらも快斗を睨みつけた。吸い込まれるようなきれいな瞳で。

——正直、もつとすごいことを想像していた。ボコボコにされるかな……とか。

名探偵だと思われたまま彼女と口づけるのは癪だった。フェアじゃないとも思った。だから手を伸ばした。……いや、ちょっと……17歳男子として邪な気持ちが全くなかったとかは言わない。けれど、相手の気持ちが自分にないまま、勘違いされたまま、彼女の唇に触れることは……出来なかった。

……なんなんだよ、もう……。

自分の気持ちがよくわからないまま、思わず言ってしまった言葉。

「そう、私は泥棒。……泥棒は盗むのが商売。……たとえそれが、人の心でも……ね」

驚きで見開かれた瞳に映っていたのは自分。

あの瞬間だけは、名探偵ではなく『自分』として認識してもらえた。その事実が心は歓喜の悲鳴をあげ、なぜか鳥肌がたつたけれど、それを得意のポーカーフフェイスで隠し、『約束』を彼女に遺し、飛び去った。

——いつたい自分は何をやリたかつたのか……。

こうやって、時間のある時に思い浮かべるのは彼女のことばかり。時間のない時だって、心の中に入ってくる。どんな時でも容赦なく入り込んでくる。ものすごい威力。

——いい加減、認めたらどうです？

何をだよ。それに、そんなハズないない。幼なじみに似てるから気になってるだけだって。

でもやたらと彼女にからんでいませんか？

キノセイキノセイ。ちょうどいいところにいるからだよ。

では、なぜ傷ついてるんです？

……えっ？

なぜ、癪だと感じたのですか？ フェアじゃないと思ったのですよ。うか。

いや、それはオトコとしてはだな……。

……質問をかえましょう。では、なぜ、今、彼女に逢いたいと思ってるんですか？

………。

ホラ、それが答えではないのですか？

……えっと、気持ちが行動に全くついていてねえんだけど……これは、やっぱり、オレが、彼女に、恋してる……ってことかー？

快斗は柵に頭を何度かうちつけるとそのままずると座り込んだ。やはり大空を見上げながら。

「……なんだオレ、この一瞬にも彼女のこと考えてるわ。ナニコノ専有具合」

とんでもねーオンナ……だな。

快斗は制服についたほこりを払いながら立ち上がると胸元のボタンの手をやり、ぺろりと唇をなめた。……と、一瞬にして白い衣装を身に纏い、廃ビルの屋上から身を踊らせる。

太陽に愛された風の香りが快斗の全身を包み込み、その香りにも彼女を思い浮かべた。あまりにも彼女でいっぱいの思考に自ら呆れながらハンググライダーのスイッチを押すと、風が快斗を上空へと押し上げる。

この景色、この空気、彼女にも見せてやりてーな……。

——ホラ、また……、彼女のこと、考えてたでしょう？

……ホントデスネ。

ああもういいよ、わかってる。わかったよ。やっと気持ちが追いついたんだ。行動に追いついた。^{オス}だから、今、彼女のところに向かっているだろう？

とりあえず、こんなに晴れててキモチイイのに、全然元気になれねー。だから、彼女の顔を見に行く。きっと、この青空と同じような気持ちになれるだろうから。

（後書き）

作中の短歌は万葉集より。

「天空の難破船」PR期間中にあつた電話でのキッドのセリフ（うる覚えですが…）

「探偵事務所のねーちゃんと飛んだら気持ちいいだろうなー」から快蘭妄想がモクモクと。

拍手おまけ話あり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0151m/>

どんな青空でもキミに逢えないと晴れじゃない。

2010年12月29日22時55分発行